時代小説傑作選

雲流るる城下町

日本文芸家協会編

雲流るる城下町
日本文芸家協会 編
© Nippon Bungeika Kyokai 1977

1977年3月15日第1刷発行
1991年11月1日第9刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-131342-8

[illegible]社文庫

雲流るる城下町

時代小説傑作選

日本文芸家協会編

〈編集委員〉
伊藤桂一
尾崎秀樹
武蔵野次郎

目次

ひとり狼　村上元三　七
夜の辛夷　山本周五郎　四一
無頼な風　中山義秀　七一
清涼　富田常雄　九二
桑名の宿　尾崎士郎　一二九
地獄舟　村雨退二郎　一四九
呂宋の壺　久生十蘭　一七六
紙漉風土記　小田武雄　二〇七
いびき　松本清張　二四九
冬の螢　船山馨　二七四
燈台鬼　南條範夫　二九七
篝火　井上靖　三一九
解説　武蔵野次郎　三三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

まえがき

村上元三

日本文芸家協会の編纂物の一つとして、「代表作時代小説」の第一集が出版されたのは、昭和三十年で、昭和五十年度まで二十一冊を数える。編纂委員も、海音寺潮五郎、尾崎士郎、富田常雄、川口松太郎、土師清二、萱原宏一、十返肇、吉田健一、和田芳恵、山岡荘八の各氏に、それぞれ交代の形で当ってもらった。協会理事として、言い出しっぺなので、第一集から筆者が編纂委員の一員をつとめ、昭和三十七年度以降、武蔵野次郎、尾崎秀樹の二氏にも常任の形で毎年、編纂にたずさわってもらっている。協会の出版物としては、毎年黒字で、出版元の東京文芸社に、バックナンバーを揃えてくれ、という注文が絶えないという。

第一集から第二十一集までの掲載作品、作家の顔ぶれなどを見ると、いろいろ感慨深いものがある。巻を重ねるに従って、時代小説の流れというものが示され、後年、貴重な資料になるだろうと思う。

こんど講談社から、これまで刊行された二十一集、収録作品四百七十数篇の中から選んで、文庫六冊として出版することになった。編纂は、伊藤桂一氏、尾崎秀樹氏、武蔵野次郎氏にお骨折りを願った。およそ二十年間の、時代小説短篇の集大成という意味でも、この文庫六冊の刊行は意義が深い。

昭和五十一年三月

雲流るる城下町

歴史ロマン傑作選

ひとり狼

村上元三

明治四十三年生れ、青山学院中等部卒業。長谷川伸に師事。「上総風土記」で昭和十五年下半期直木賞受賞。戦後「佐々木小次郎」「加賀騒動」「水戸黄門」「次郎長三国志」等の名作を発表。長谷川伸の門下集団「新鷹会」を組織、後進の指導にあたっている。

昔ばなし

「いやいや、おれなんざあ、博奕打で通った、などとは言い切れねえ。二十二か三の時にぐれて、そうだねえ、二年か三年あとに、あいつを見てね。博奕打がいやになって、足を洗った。こうやって茶店の爺をやってるからこそ、この明治の御世にも泰平無事で生きていられるがね。あのまま博奕打でいたら、どうせ何処かの喧嘩場でいのちを落していたか、さもなければ、もっそう飯の味に慣れるか、ろくな終り方はしていなかったろうよ。あいつのことかい。そうよなあ、あの男に初めて会ったのは、いつごろだっけかなあ。ご大老の井伊掃部頭様が殺されなすったと

いうので、諸国までその評判が聞えていた年だったと思うよ。あの男はね、博奕打仲間でいう、急ぎの旅ばかりしていた男でよ。急ぎの旅とは、つまりは、兇状持か、仇持ちの博奕打の旅のこと。あの男はのう、生国を訊いても、はっきりした事は言わなかった。無理に訊くとな、忘れた、と言やあがる。それでも、おれの知っている親分の家に草鞋を脱いだときは、処名を追分と名乗ったなあ。追分などというところは、一つ国にいくらもあるもの。つまりは、生国を人に言いたくなかったのだろうよ。名は伊三蔵といった。そのころ、三十を二つ三つ越していたかなあ。べつに、女に惚れられるようないい男前でもなかったが、妙に女には好かれた。背も高いほうではねえ。しょっちゅう旅をかけているでね。顔は陽に灼けている。どうせ旅博奕打だもの、いいなりをして歩いてるわけではねえ。博奕場で目と出たら金は入るが、そうでねえときは、どこかの親分の家の台所で、きちんと膝を揃えて冷飯を食っているのが旅博奕打だからね。それに、伊三蔵というのは、決して月代を剃ったことがなかったよ。それでいて無精なのかと思うとそうでもねえ。どんなところにいても、毎朝、顔はきちんと剃っていた。つまりは、どこでいのちを落すことがあっても、死顔は見っともなくしねえように、という心構えさね。いやいや、お侍のそういった覚悟とは違ったもんだが伊三蔵のように旅にんだこの入っている男、ことに自分のいのちをねらっている奴がある、となると、自然にそういう心がけになるのだろうよ。おれも、一ぺん伊三蔵に訊いて見たことがある。そういつも月代を剃らねえでは、うっとうしくなる時がありやしねえか、とね。そうしたら伊三蔵が、にやっと笑った。あの男が笑う時など、めったにあるもんではねえ。一緒に女郎買いにいっても、人が馬鹿っ話をしている中で、ひとりで、ぐいぐいと酒をのんで、にこりともしねえ男だからね。そう、その時にのう、伊三蔵は、

おれに月代の延びた頭を突きつけてよ、よく見てくれ、おれの頭の中には刀傷があるのだ、と言うた。本当にその通り、脳天のところに、すうっと長く、刀傷の痕があったっけよ。その傷を人に見られるのがいやなんだ、と伊三蔵はいった。ただでさえ素人衆には嫌われる博奕打のことだ、わざわざ頭の刀傷をひけらかせて歩くことはねえ、と伊三蔵は、その時に言ったな。おれあ、こうやって今では茶店のおやじで暮しているから、素人衆のお前たちとも、茶をのみながらこんな話が出来るが、博奕打というのは、もともと素人衆とは、まともにつき合いの出来ねえ人間さ。道を歩く時だって、まん中は歩かねえさ。わきのほうを通って、堅気の前では出しゃばらねえ、としたのが博奕打の作法だったな。色恋の話になるがね、だから博奕打などというのは、堅気の娘や女には、決して手は出さねえのが分をわきまえた仕方、というのさ。そういう事にかけては、伊三蔵は、よく博奕打の分を守った男だった。どこの親分の厄介になっても、そこの親分が、これっぱかりでも素人衆に迷惑をかけている、とわかると、ぷいっと草鞋をはいて飛び出してしまった。もともと旅博奕打の中でも、人づき合いのいいほうではねえ。おらぐらいのものだろう、ときどき一緒に酒をのんだのは。おらのほうがずっと年下だし、渡世も駈け出しだでよ、孫八、孫八といって、よく博奕場へ連れて行ってくれた。それに、伊三蔵という男は、博奕場でのやり方が、きれいだったのう。おれはお袋の腹の中から出てきたとき、両手に一つずつ賽ころを握っていたんだ、とにこりともしねえで冗談をいった事があったが、本当にそうか、とも思えたねえ。どこの博奕場へ行っても、あいつの眼は、壺皿の中を見通しに見抜いてしまうのではねえか、と思うぐらい、ちゃんと丁半の目を見てしまうんだ。博奕打はね、いくら勝負に強くても、立ち際が大切でね、目が続いて出ている時は、立つと、汚ねえ、といわれる。無職同士の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

博奕のとき、伊三蔵は、見ていて凄くなるほど勝つのが常だが、そういう時には場を立たねえ。場がさびれるからだね。最後まで残っていた。それだから伊三蔵は、しょっちゅう懐中が温かで旅をしていたか、というと、そうではねえ。野宿をして二日も飯を食わねえ、といって眼を凹ませていたこともある。そうさねえ、あいつと初めて会ったのは、やはりこの木曽路だった。いや、この上松のほうではねえ。もっと東だ。坂本の宿場でよ、寒い冬の最中だったなあ。おらは、親父から勘当されてよ、同じこの上松の甚兵衛親分の盃を貰って、上松の孫八、などと名乗りながら、それが初旅だっけ。何しろ博奕打に成り立ての、腰にさした一尺八寸の脇差を、やたらに引っこ抜いて暴れたくて仕方がねえ時さ。そういえば甚兵衛親分はその後、何うなったかのう。前橋の懲治監に入っている、と聞いたのは、もう三年も前だからの。そうそう、その坂本での話だ。坂本にそのころ、半分はお百姓で半分は博奕打の、与左衛門という親分がいた。おらは、そこに草鞋を脱いでの。修業だから旅をして来い、と甚兵衛親分にいわれての初旅だ。万事慣れねえ事ばかりだが、曲りなりにも仁義を切って、夕方、その与左衛門親分の家に草鞋を脱いだ。もう夕方だったな。あまり大きな家ではねえ。自分で裏へ行って、井戸端で手足を洗い、台所へ上ると、そこの家の乾分が箱膳を出してくれた。飯櫃も出ている。お菜は一品さ。飯は冷てえ。給仕は自分でするんだ。ご当家親分さん姐さん、頂きますでござんす、と奥のほうへ挨拶をして、さて飯を食おうとしてから、はじめて気がつくと、先客がいた。台所の囲炉裏のそばの冷てえ板敷の上に、きちんと坐って、旅にんが一人、ぱくりぱくりと煙草をのんでいる。台所に一つ出ている行燈の蔭になっていたので、よく見えなかったのだが、月代を延ばして、囲炉裏の火の照り返しが、ぼうっと顔に当っている。三十二三の、なんの変哲もねえ顔つきでね、大した男で

もねえように見えたが、どうしてどうしてそうではなかった。それが追分の伊三蔵でね」

伊三蔵という男

「どうも気がつきませんで」

旅にんの先客には丁寧にするものだ、と教えられているので、上松の孫八は、箱膳を押しやってから、きちんと膝を揃えた。

「向いましての兄さんとは、初の御見にござんす。あっしは上松の孫八と申し」

「ご無礼さんだが」

ちらっとこっちを向いて、その旅にんは、がざがざした、感じの悪い無愛想な声で、

「おれは急ぎの旅でね、仁義は略さして貰います」

「へい」

といったきり、孫八は、あとの言葉が続かなかった。

すぐに対手は、囲炉裏の火へ眼を落してしまったが、こちらを一度きり見た眼が、ぎょろっとして凄いので、ぞくっと孫八は、背筋が冷たくなったからだった。

孫八が、自分で膳を片づけ、茶碗を洗っている間に、その男は、旅にんに当てがわれた部屋のほうへ入ってしまった。

まだ臥るにも早いので、孫八は、与左衛門の乾分たちが手なぐさみをしている中へ入って、自分も金を張った。

取ったり取られたりしている間に、

「あの旅にんは、何んてえ野郎だね。ひどく愛想の悪い奴だが」
と訊くと、与左衛門の乾分は、子供々々した顔つきの、まだ旅にんずれのしていない孫八を、呆れたように見て、
「あれを知らねえのかい。追分の伊三蔵さ」
「へええ、あの人が」
孫八の言葉使いまで変った。
親分の上松の甚兵衛のところにいたころ、聞いたことがある。
諸国を歩く旅にんの中に、追分の伊三蔵という男がいて、人づき合いは嫌いだが、ひどく腕が立つので、喧嘩だというと、どこの親分も、伊三蔵の居所を探して、助っ人を頼みに連れて来る、という。もともと兇状持で、ほうぼうに敵を作っているので、喧嘩のあと兇状を背負って、そのまま旅へ出て貰うのに都合がいいからでもあった。博奕にかけても神業のような手並を持っているというが、親分から乾分の盃を貰って、一つ処に落着いているのが嫌いで、いつも旅から旅を歩いているという。
「あの人が、伊三蔵さんですか」
さっきの眼つきを思い出して、また孫八は、背中がぞくりと冷たくなった。
与左衛門の家には、旅にんの泊めてもらう部屋は六畳一つしかないので、いやでも孫八は、その伊三蔵と一緒に臥るほかはない。
そっと部屋へ入ってみると、伊三蔵はもう寝床の中に腹這いになり煙草をのんでいた。行燈の灯が細くしてある。

「ご免下さい」
おそるおそる孫八が、挨拶をして部屋へ入ると、
「お先へ」
低い声で、伊三蔵は答えた。
部屋の隅に畳んである薄い夜具を自分で敷きながら、ちらりと孫八が見ると、伊三蔵は、長脇差を自分の布団の中に入れて、柄頭だけがのぞいていた。
また、ぞくっとして孫八は、自分の脇差を枕元へおいて、いそいで布団の中へもぐり込んだ。
「お休みなさんせ」
「消すぜ」
身体を乗り出し、伊三蔵は、行燈の灯を吹き消した。
窓から、ひやりとした冬の月の光がさし込んでいる。
となりに名代の旅にんが臥ている、となると、なかなか、孫八は寝つかれず、何度も寝返りを打っているうちに、いつの間にか臥てしまった。
ふっと何かの音を聞いて眼をあけると、もう夜中だろう、窓の月の光が、ずっと冴えている。
孫八は、顔を横に、伊三蔵のほうを向いて臥ていた。
夜具の中に腹這いになり、伊三蔵は、煙草をのんでいる。窓は足元のほうにあるので、暗い中で煙草の火が赤く見えた。
声をかけようとしてから、孫八は思いとまった。
伊三蔵が、右手に煙管を持ちながら、左手に何かを持って、しげしげと眺めているのに気がつ

いたからだった。
はじめは何んだかそれが判らず、薄眼をあけてよくよく見ているうちに、孫八は、妙な心地がした。
伊三蔵が左手に持っているのは、太鼓に犬張子のついた、赤ん坊の玩具だった。
そう気がつくと、悪いものを見たような気がして、あわてて孫八は、眼をつぶってしまった。何人も敵を持っている追分の伊三蔵が、赤ん坊の玩具を手にして眺めているとは、何うしたわけだろう。どこかに伊三蔵は、女房と子供がいるのだろうか。
そんな事を考えているうちに、孫八は、また、うとうとと寝てしまった。
その次に孫八が眼を覚ましたのは、もう夜明けに近いころだろう。月の光が、だいぶ薄らいでいた。
伊三蔵は、仰向けに寝て、かすかな寝息を立てている。
ふと孫八が考えたのは、ああやってぐっすり寝込んでいる時なら、伊三蔵のような旅にんにも油断があるだろう、という事だった。
おれも博奕打なのだから、試してやれ、という気になり孫八は横になったまま、そっと枕元の脇差へ手をやった。
伊三蔵の寝息が、はっきり聞えている。
両手を孫八は、長脇差の柄と鞘へかけ、そっと五分ほど抜いてから、ぱちんと鍔音を立てた。
ふっと、伊三蔵の寝息がやんだ。
「よしなよ、若えの」

伊三蔵の低い声がした。びっくりして起き直って見ると、伊三蔵は仰向けに寝たままの形で、呟くようにいった。

「対手が、恨みも何もねえお前だ、と判っているからいいのだ。さもねえ時は、おれのドスが、抜討ちにお前の首っ玉へ食い込んでいるだろうぜ」

「ど、どうも」

相済みません、という言葉が出ず、がたがたと震えながら孫八は、また寝床へもぐり込んでしまった。

あくる朝、孫八が眼を覚ましてみると、伊三蔵の寝床はきちんと畳まれて、部屋の隅に積んであり、当人の姿は見えなくなっていた。

あわてて孫八も起き出し、自分の寝床を片づけて、与左衛門の乾分に訊いてみると、伊三蔵は、たったいま、親分に挨拶をして発足したという。

行先は、西の松井田の方角らしい、というのだった。

あわてて孫八も、朝飯を掻き込むと、与左衛門親分に挨拶するのは忘れず、そこから飛び出した。

西へ向うのは逆戻りだが、孫八が伊三蔵のあとを追ったのは、ああいう旅にんと道づれになって修業をしたい、と思ったからだった。

山々は、もうすっかり雪に包まれ、街道には一めんに霜柱が立っている。

十八町という山道にかかり、碓氷峠のほうへ懸命に駈け登って行くうちに、孫八は伊三蔵の姿を見つけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton